

辺境からコロンビアの今を見る

責任者：幡谷則子（上智大学）

○報告者

近藤宏（神奈川大学）「国内避難民をめぐる真偽の言説と可視化の効果」

千代勇一（帝京大学）「コロンビアの辺境地域における麻薬問題の過去と現在」

柴田修子（同志社大学）「コロンビアにおける地方都市の形成—トゥマコの発展を事例として」

幡谷則子（上智大学）「辺境の歴史から見直す飛び地経済の形成と収奪」

○討論者

大串和雄（東京大学）

2016 年に政府とコロンビア革命軍（FARC）とが和平合意に調印した後も、コロンビア国内の元紛争辺境地域では、暴力や貧困に苛まれる人々が後を絶たない。2019 年以後都市中間層を中心に全国的に組織された対政府抗議行動も、平和構築政策の問題に触れたものの、農村部辺境地域が抱える社会的排除への取り組みと連携しているとはいえない。本パネルは、国家から長年不可視の状況にあったが、紛争地と化したことで「可視化」されるようになった辺境に生きる人々が、いかに現在の和平構築の課題に直面し、それを乗り越えようとしているか、暴力との共生の中で、主体的に生きようとしてきたかを、4 人のパネリストが異なるアプローチによってあぶり出し、コロンビア社会を見直す試みである。

本パネルで扱う「辺境」の定義は、単なる地理的な意味に基づくものではない。開発フロンティアとしての辺境地、国家行政サービスの提供域外に置かれていた地域、それらから逃れてきた地で新たな社会的排除を受け続ける人々など、いずれもいわゆる正史では埋もれている人々とその営みが展開される場所・地域を捉えている。

近藤は、コロンビアに約 840 万人いると推計される（UNHCR 統計）の国内避難民（desplazados）に光を当てる。彼らは内戦の暴力の影響から逃れ、故郷とは別の、相対的に暴力の強度の弱い場所で、新たな生活を始めるように強いられた人びとである。暴力から逃れた避難先において、真偽をめぐる言説がついて回るという現実に直面する彼らもまた、辺境に生きる人々である。その人物の身元を疑う観点からの発話、応答のほか、避難民の発話内容が真偽の判断にかけられるといった事態である。報告では、避難民は本物かどうかというコロンビア的な問題を複数のエスノグラフィーや報告者の調査から描き、歴史的に考察することで、人道的援助が期待される人びとが同時に潜在的嘘つきとしても問われる状

況、つまり、ある人物形象がこのように社会構築される事態を「社会の周辺に生きる人々を包摂する過程で起こる排除」として問題化する。

千代は、麻薬問題から辺境にアプローチする。コロンビアではコカインの主原料であるコカは違法作物に指定されているため、その栽培地は生態学的な条件だけでなく、政府の統治の行き届かない地域に分布している。また、コカインは非合法武装組織の資金源となり、紛争の長期化と複雑化を招いてきた。つまり、麻薬問題は、単なる薬物犯罪ではなく、コロンビアの政治、経済、社会の歪みの問題として理解されるべきである。そして辺境はまさにそれが具象化した空間といえる。麻薬を資金源としてきた **FARC** との和平プロセスにおいて、「違法薬物問題の解決」は和平交渉の 6 つの議題の 1 つであった。しかし、その後もコカの栽培面積は高い水準を保っている。辺境と親和性の高いコカインとコカを手がかりとし、過去から現在に至る辺境における麻薬問題の動向を考察する。

柴田は、地域間格差の激しいコロンビアにおいて、多次元貧困指数などの指標から中央へのアクセスが悪いほど貧困化しやすく、内戦の被害も激しかったことを確認する。そして、このような状況にある地域を「辺境」と捉え、そうした状況がどのようにして生まれてきたかを、地方都市の形成を歴史的に考察することで明らかにする。本報告ではエクアドルとの国境近くに位置するトゥマコを事例として、同市の形成史をたどる。植民地時代を通じてコロンビア南部太平洋岸地域で重要な地位を占めていたのは、金鉱山があるバルバコアであった。同地域の先住民の人口減少とともに、18 世紀から黒人奴隷が鉱山労働を担うようになった。トゥマコは 19 世紀後半までバルバコアに食料を供給する小集落であったが、1852 年の奴隷解放令を機に人口移動が開始されたことで、徐々に発展していくことになる。19 世紀以降のトゥマコの発展を追いながら、なぜ、今日のような辺境地域としての様相をもつに至ったかを考察する。

最後に幡谷は、コロンビアのスペイン征服と内陸部開拓の歴史が、マグダレナ川とアトラト川という 2 大河川の運航が基軸となっていたことを振り返り、その周辺部に形成された植民地起源集住地が、独立後も紆余曲折を経て資源・土地・労働力の収奪によって形成されてきた飛び地経済の傍らで辺境地域としての性格を保ってきたことを指摘する。本パネルで取り上げられた地域や人々の生き様の中に、21 世紀の開発戦略の影で国家と市場から「統合」されつつも社会的排除を受け続けていること、それが可視化される過程で新しいコンフリクトと抵抗の力を生んでいることを指摘する。